イエスから目を離さない　　**ヘブル 12:1～3**

昔、ある電気製品メーカーの家電キャッチフレーズに「目のつけどころが違うね」という言葉がありました。毎日、同じものを見ているのに思いもつかなかったアイデアが出てきた時にそう言われますね。同じものを見てはいるけれども自分のような凡人には見えないものがある人には見えている、そんな風にも言えます。信仰の世界でも同じようなことが言われています。今日の前のヘブル 11 章では、信仰がこう定義されています。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」（ヘブル 11:1）ヘブル 11 章に登場する信仰者たちは、「まだ見えていないもの」を、「見て」、「確信」した人たちでした。ノアはやがて洪水が来るという啓示を受けたとき、その前兆すらないときに、箱舟を作りはじめました。人々は、「こんな平地で舟を作って、どうやって川まで運ぶのか」と言って馬鹿にしましたが、ノアは、この平地も、山も、みな水の下に沈むことを、信仰の目ではっきりと見ていました。アブラハムは、神の召しを受けたとき、行き先も分からないのに、故郷を離れ、旅立ちました。行き先が分からない、自分にどのようなことが待ち受けているかも分からない、しかし信仰の目で見ていたのです。モーセはエジプトの王子として育てられ、その恩恵を約束されていましたが、地上の報いよりも、神からの報いに目を向け、神の民と苦しみを共にしました。その姿をモーセはじつに、「目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。」（ヘブル 11:27）と記されています。そういうことを聞くと、クリスチャンは何か現実を見ないで夢見る者のようだという人もおられます。しかし、私は思うのですが誰でも明日やすぐ先に何が起こるか分からない中を過ごしています。それこそ、ほとんどの人は根拠なく「大丈夫」、「何とかなるだろう」、「明日があるさ」、と勝手に思い込んで過ごしていますが、その方がよっぽど無謀なことのように思うのですがいかがでしょうか？

確かに「私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」（コリント第二 4：18）とあるように、信仰者の「目のつけどころ」は、この世の人のそれとは違います。信仰者は人生を永遠の観点から見ています。神の愛、恵み、導き、報いなど、世の人には「見えないもの」を信仰の目で見て、その観点から人生を歩んでいるのです。時々、鳥が空から地上を見るように、自分は地上を歩いていて、空からそんな自分を見てどこに向かって進んでいるのかなと想像することがあります。目の前に大きな壁が立ちはだかっていても上空から眺めるとそれを超えたら広々とした大草原が待ち受けている、そんな光景を思い浮かべるのです。自分を客観視するとも言えるでしょう。絶望的に思えることも神様はその先を備えてくださる。その究極の光景は死の先に、神とともに永遠のいのちを生きるというものです。

さてヘブル人への手紙は、11 章で旧約時代の信仰者の例をひいたのち、今日の 12 章でクリスチャンに対して、「イエスから目を離さないでいなさい」（ヘブル 12:2）と命じています。旧約時代の人々でさえ、やがて来られるキリスト（救い主）を仰ぎ望んだのであれば、新約時代のクリスチャンは、すでに来られたキリストに目を留めるのは当然のことだと言っています。ヘブル 12:2 で、イエス・キリストは「信仰の創始者であり、完成者である」と言われています。「創始者」というのは英語で〝ファウンダー〟よく証券会社とかで何とかファンド（基金）と呼ばれるものですね。ものごとを始めた人、基礎を築いた人のことを言っています。イエス・キリストはまさに、わたしたちの信仰の土台を据えてくださったお方であり、また、信仰の土台そのものだということです。土台さえしっかりしていれば例え、間違ったり、予想外のことが起こってももとに返ってやり直すことが出来ます。

そして創始者のあとに続く者は、創始者の意志を受け継ぎ、創始者に見習います。イエスが信仰の創始者であるなら、イエスは信仰の模範でもあるはずです。

ヘブル 12:3 では、「あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それ

は、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。」とあります。この「考える」は新約聖書ではここでしか使われていませんが、「ひとつひとつ数える」、「注意深く考察する」、「深く考える」という意味になります。イエス・キリストがわたしたちに代わってしてくださったことや、わたしたちに先んじてしてくださったことを、ひとつひとつ、注意深く考え、自分のものとすることを教えています。

多くのスポーツの選手は、自分を訓練する時、自分よりも優れた人をモデルにして、その人がするとおりのことを真似ることから始めるそうです。モデルとする人を真似るために、その人をあらゆる角度から観察し、ビデオに撮ったものを繰り返し見て研究するのだそうです。わたしたちは模範となるものを真似ることによって、ものごとを習得していきます。そして、真似るためには、その対象をよく見る必要があるのです。それは信仰の世界でも同じです。わたしたちが信仰者として成長することを願うなら、じっとキリストを見つめ、よく観察しなければなりません。具体的には、聖書によってイエス・キリストを学び、祈りの中でイエス・キリストを深く思いみるのです。そのようにして、イエスに目をとめ、イエスを思いみることを忘れないようにしましょう。

このようにイエスは信仰の「創始者」ですが、同時に信仰の「完成者」です。イエスが信仰の「完成者」と言われているのは、イエスがわたしたちの救いのために必要なことをすべて成し遂げてくださったからです。イエスは十字架でわたしたちのすべての罪を背負い、私たちを罪から贖ってくださいました。また、その復活によって、信じる者に永遠の命を与えてくださいました。イエスは今も生きて、わたしたちの祈りをとりなしてくださり、やがて、この世界を一新するために、再び、世に来られます。そのとき、イエスは救いを完成させてくださるのです。じつにイエスは信仰の創始者であり、完成者です。

また、イエスが「信仰の完成者」であるという場合、それは、わたしたちひとりひとりのうちに働いて、わたしたちの信仰を育て、完成に至らせてくださることも意味しています。スポーツでも模範演技を見ると貴重な勉強になりますが簡単そうに見えることも、いざ、自分がやろうとすると、どんなにしてもできないということがよくあります。そんな時はどうすればいいのでしょうか。

一番いいのは、コーチの指導を受けることです。モデルは遠くにいて手が届きませんが、コーチは選手のそばに離れずにいてくれます。しかもそのコーチが自分の目指すものにおいて達成、獲得しているなら最高のコーチと言えます。何故なら、到達する世界がどんな世界か知っているからです。その世界でチャンピオンならチャンピオンにしか見えない景色を見ているのです。

イエスは、模範（モデル）として遠くにおられるだけでなく、わたしたちの側につきっきりで、わたしたちの信仰を、「手をとり、足をとり」コーチしてくださるお方でもあるのです。スポーツの世界では、何度やってもうまくできないと、コーチがさじを投げてしまう場合がありますが、信仰のコーチであるイエスは、わたしたちが何度失敗しようとも、決してさじを投げたりなさいません。

イエスに目を向け、イエスに見習いましょう。イエスのコーチングを受けましょう。それによって、わたしたちは、信仰のレースを最後まで走り抜くことができ、天の栄光にゴールインすることができるのです。週報に記されていますように一昨日の金曜日の夜に敬愛する武岡光男兄は天に召されました。あまりにも突然のことで驚きと悲しみがまだまだ収まり切りません。ただ最後のメールのやり取りを紹介したいと思います。・・悲しいのは自分が寂しいから、自分が辛いから、結局、自分の思いばかりが心を占めるという自分自身、自己本位な存在だと思います。しかし、ここで私たちが見なければいけないのは武岡兄が信仰の目をもって見ていたもの、天の御国、和子姉妹を含めて天にいる兄弟姉妹たち、そして中心におられるイエス様、つまり武岡兄の信仰を見、その先におられる主を共にあがめることではないでしょうか。